News 2

セネガル

対症療法的な空しい援助へのオルタナティブとは？

中田豊一　ムラのミライ代表理事

ムラのミライは、2017年2月からセネガルで、現地NGO、Intermondesと共同で農村青年育成のプロジェクトを開始しました（正式名称「地域資源の循環による農村コミュニティ生計向上プロジェクト～セネガル農村青年層のためのファーマーズ・スクール」）。半乾燥地の３つの村で、出稼ぎに頼らない暮らしを目指して、それぞれ20人前後の若手農民を対象に研修を重ねて行っています。私たちが行うのは、研修を通して彼らの学びを側面から支援することだけです。移動費と昼食を除き、資金的な援助はしません。それでもこれまでの3回、計8日間の研修に、若者たちは毎日真剣な眼差しで参加していました。

森の消失が表土の劣化をもたらし、それが土壌の保水力を奪うため地下水位が低下し水不足が深刻化する。洪水が頻繁に起こるようになり、表土の流出が加速され、結果として作物が育たなくなる。それを防ぐためにはまず、水流を緩和するために必要なあらゆる対策を、持っている資源を最大限に活用しながら実行していくしかない。村の現実と自らの経験の分析を通してこうしたことを深く理解した農民たちは、小さな堰をあちこちに設けたり、植樹や植栽をしたりなど様々に動き始めました。

私たちは個人に働きかけるだけなのに、村単位で動かないと効力がないことに気づいた若者たちが、他の村人にも真剣に働きかけています。これらが、数年のうちには大きな効果をもたらすこと、土壌の改良、作付けと農法の工夫などの技術的な研修はこれと並行してこそ効力があることをインドなどでの実践を通じて、私たちは熟知しています。

やがて彼らが組織の必要性に気付いて申し出てきたなら、「何をする組織ですか。そのためにはどんな仕組みや知識が必要ですか。以前も同じようことをやったことがありますか」などとたずねながら、マネジメント能力の強化を促します。開発であり、リーダーシップの育成です。

この活動が画期的なのは、研修参加者の真剣さが際立っていることです。これまでのどのプロジェクトでもその点では他の追随を許さないものだったのですが、参加者が課題を自分のことと捉えて、真剣に取り組み出すプロセスが、こんなに早く出現することはなかったと、研修講師を務めた和田も言っています。

それには大きく2つの要素があると思われます。

ひとつは言うまでもなく、私たちの方法論が、ファシリテーションの手法と研修内容の両面でますます完成度を高めてきたことによります。

もう一つには、今回の活動地域の人々にとって、水資源の劣化と表土の急速な喪失が、身近で深刻な問題として、実感をもって捉えられていることがあるとしか考えられません。

改めて振り返ってみると、私が10年以上関わってきたJICA関西での一連の参加型コミュニティ開発研修でも、アフリカから来た研修員にこの課題への関心を強く示す者が特に多かったようです。

他方、国際社会は、アフリカの貧困を世界の最大課題のひとつとして、様々な取り組みを行っているにも関わらず、なかなか展望は開けないままに、いわゆる「参加型開発」の名のもとに決して持続しない収入向上プロジェクトや、結局は出稼ぎを後押しするだけの教育など、対症療法的な空しい援助を際限なく注ぎ込んでいます。

そうした中、私たちの方法論と手法は、「貧困」という現象を招来する、より根源的な現象（土と水の劣化の問題）に効果的に対処できる唯一無二の、空しくない援助を可能にするものだという確信をより強めています。

この方法の普及と活動の拡大に総力を挙げて取り組むのが、国際協力組織を標榜するムラのミライの使命であると痛感しています。

今後は、この現場を舞台にした研修やスタディツアーなどを企画して、なるべく多くの皆さんに見ていただく機会を作るつもりです。